



映画「がんばっていきまっしょい」

みたいなのを感じました。この物語を何とか映画化してみたい、そんな気持ちに強く駆り立てられた私は、早速、当時松山市在住の敷村さんにお会いし、映画化の快諾を得たのです。「必ず愛媛県内で撮影して下さい。」というのが敷村さんの唯一の希望で、私と監督である磯村一路さんは、敷村さんの自ら運転する車で小説の舞台になった松山東高はもとより、梅津寺にある東高ボート部艇庫など小説の舞台となったほとんどの場所を案内していただきました。残念ながら海岸線には高層マンションが立ち、七〇年代当時とは景色が様変わりしていました。が、その時見た海の色は、当時ともスクリーンの中とも変わらない青さと輝きを放っていました。

この原作者との密接なシナリオハンティングという作業があった、磯村監督は脚本を書き上げ、今治の海岸に東高ボート部艇庫をセットとして再現することができました。その後も撮影のため、敷村さんからは様々な協力をいただきました。当時の松山東高のボート部の日誌や部員たちの写真、制服や生徒手帳に至るまで、当時の限りの資料をお借りました。そのおかげで、スクリーンの中の少女達は、よりリアルティーを持った存在として輝いています。また何より、この作品のお蔭で、私も故郷で映画を作るという恩恵に与りました。



映画「がんばっていきまっしょい」
田中麗奈

映画のプロデューサーという仕事に就いて、かれこれ二十年たちました。しかし、自分の故郷で撮影する機会というのは意外に少ないものです。六年前、やっとなんなチャンスが巡ってきました。

偶然、「鳩よ」という文芸誌で松山市主催『坊っちゃん文学賞』の大賞が発表されたのを目にしたのです。その受賞作が、敷村良子さんのお書きになった「がんばっていきまっしょい」という小説でした。七〇年代半ばの松山東高を舞台に女子ボート部を立ち上げた女子高生たちの青春物語です。実際、敷村さん自身が、当時の松山東高女子ボート部に在籍され、小説は、一級上の先輩で数々の困難も十代の純粋な意志と負けん気でのり越え、女子ボート部を立ち上げた一人の女子高生がモデルになっています。何か、故郷愛媛に対する懐かしさと同時に、誰もが遠くに置いてきて忘れていた高校生活のたったの三年間、その一瞬の煌めきへの懐かしさ

愛媛の映画人

棚井 省志

Shohji Masui

愛媛の映画人

PRODUSER

楽しんでいただけたようでした。そこには、美味しいみかんや新鮮な魚料理がいつもあり、ロケ地となった大三島の人々の暖かいもてなしと協力があつたからです。東京生まれで帰国子女の木村さんもすっかり気に入られ、愛媛が第二の故郷になったと言ってくれました。

この映画には、そのほか、八幡浜ご出身の林美智子さん、吉海町ご出身の吉本興業の人気



映画「船を降りたら彼女の島」木村佳乃・大杉漣

者・村上ジョージさんにも出演していただいています。いつも映画を作っていることは、映画はスタッフや俳優さんたちだけの力ではできないということですね。撮影を受け入れていただいた地元の方々の力がなくてはできません。そして、作品は無事完成し、昨年からの今年の一月初旬まで愛媛県内で上映され、多くの県民の方々に観ていただきました。この上映に関しては、地元の映画興行会社である佐々木興行のスタッフのみなさんの尽力で、県内各地での映画館上映が実現し、しかも大ヒットという成功を収めました。そして現在は、日本全国で順次公開されているところです。

こうした県出身の方々との映画を通しての出会いが、私を少しずつ成長させてくれているように感じます。新たな人との出会いを作るのが、映画という仕事なのかもしれません。またこれからも、新しい出会いを心待ちにしながら仕事を続けていこうと思います。



映画「船を降りたら彼女の島」木村佳乃・大谷直子・大杉漣

ますい・しやうじ 一九五六年、愛媛県久万町出身。上智大学文学部卒業。株式会社アルタミラビクチャーズ代表取締役、映画プロデューサー。代表作・「ファンシイダンス」（一九八九年）、「あさってDANCE」（一九九一年）、「シコふんじゃった」（一九九二年）、「Shall we ダンス?」（一九九六年）、「卓球温泉」（一九

九八年）、「がんばっていきまっしょい」（一九九八年）、「ウォーターボーイズ」（二〇〇一年）、「ドッジGO!GO!」（二〇〇二年）。最新作は、愛媛県が中心となり製作された「船を降りたら彼女の島」、昨年十一月より愛媛県で先行上映され大ヒットです。

映画「船を降りたら彼女の島」木村佳乃



講師としてもご一緒させていただき、愛媛縁の映画人、伊藤大輔、伊丹万作についての興味深い話を聞かせていただきました。

日々映画の製作現場だけの仕事に追われている者にとって、映画の研究であり、しかも心の隅に同じ幼少の頃の風景を持つ佐伯さんとお付き合いは新鮮で、現場の瑣事に麻痺しかけた脳みそをリフレッシュさせてくれます。

また、「Shall we ダンス?」監督・周防正行）や『がんばっていきまっしょい』、『ウォーターボーイズ』（監督・矢口史靖）など我々の作る作品を温かい目で見守り続けて下さる方が、故伊丹十三監督のプロダクションの代

表を務める玉置泰氏です。玉置氏は松山の名菓一六タルトの経営者でもあります。伊丹プロは、相変わらず取り巻く状況の厳しい日本の映画製作プロダクションの中で、唯一、映画を作品としても、またビジネスとしても成功させています。その実績は、われわれ独立プロのお手本であり、目標でもあります。そして、かねてから後身の私たちを指導していただいております。三年前、玉置氏より、「愛媛県が中心となり映画を作る計画がある。その製作に参加してはみないか」と声をかけていただいたのです。

そういう経緯で生まれたのが、この冬愛媛で先行上映された「船を降りたら彼女の島」です。この製作にあたっては、「がんばっていきまっしょい」での経験が少なからず生かされるかもしれないと思い、磯村監督にも再度監督をお願いしました。そして、県のスタッフの熱心な協力を得て、映画の舞台となる愛媛県内の地域、題材を

広く集めることから作業は始まりました。また地元企業の映画文化へのご理解もいただき、製作体制は速やかに固まりました。松山市内はもとより、内子町、山村留学の広田村、シーサイド留学の野忽那島、中島町、しまなみ海道、保内町、新居浜市、大洲市等、県内の各所をまわりながら、映画のストーリーとロケ地を決めていったのです。ロケーションハンティングとシナリオを同時に進めた点では、今まで経験しない純粋な映画作りができたと自負しています。

それは、数年ぶりに実家の瀬戸内海に浮かぶ小さな島に里帰りした娘が父親に結婚を告げるまでのたった数日間の話ですが、冬の静かな瀬戸内の海が寡黙な父と娘の心情の揺らぎを映して、この普遍的テーマをいっそう深みのあるものとしています。主演で娘役の木村佳乃さん、父親役の大杉漣さん、母親役の大谷直子さん他みなさん、海から吹きつける冬の冷たい風にもかかわらず、大三島でのロケを